

『グローバル天理』第8号掲載論文要旨

井上昭夫 「巻頭言 世界語としての日本語を考える」

研究所主催の講演会において梅棹忠夫氏は、IT革命の時代に外国と対等に渡り合うためには、日本語におけるローマ字使用が必要であると主張した。漢字かなまじりからローマ字への移行は、伝統的な和服から機能的な洋服への移行と同じだという氏のアナロジーには説得力がある。

太田登・中井精一 「天理教原典とやまとことば(8) 原典と表現法[3] —ハル・ヤハルについて」

近畿方言の待遇表現形式のなかで、特に注目される助動詞「ハル・ヤハル」について、原典『おさしづ』におかれ使用実体について検討を加えてみた。

笹田勝之 「天理教における悟りの構造について—他宗教との比較を通して—(8) 第一章「知ること」について [3]」

天理大学の教育は、「人間形成」にあるが、それは人をして「世界(社会)化」するのではなく、「超世界(社会)化」すること、世界(社会)から自由な人間、超越的絶対的真理を求め、実践する人間を形成することである。

堀内みどり 「天理異文化伝道(8) 天理教のコンゴ伝道 [7] —初代会長時代〈1963—1967〉【1】」

高井猶久は、1963年11月16日、布教の為、コンゴへと出発。ブラザビルでノシंगाと再会した高井は、決意を新たにする。そして、ブラザビルの人々の陽気さや明るさは高井の心の希望の灯となった。

佐藤浩司 「天理教東南アジア伝道誌(6) 戦前のフィリピン伝道 [4]」

北越支教会所属の高野馬治郎と、それに関わる保坂六郎治と小川孔一・ミネ夫妻のマニラにおける伝道について述べる。

金子昭 「天理経営学—その歴史・哲学・展望—(8) 思想編 宗教と経済・経営 [2]」

キリスト教においては、人間の労働は墮罪以降、惨めな労苦となった。しかし人間が勤勉に働くことは神によって推奨される。その後のキリスト教の歴史において、多少の変動はあったものの、勤労は尊ばれ、怠惰は戒められた。

佐藤孝則 「エコロジーの思想と実践(8)問われる現代の循環システム」

日本では、1950年の代高度成長期に入るとさまざまな地域でさまざまな公害が発生し、そのたびに国民は甚大な被害をこうむった。そのため、以前の日本は、世界のマスコミから「公害大国」の異名を与えられていた。しかし、公害のなかでも、とりわけ「体内環境」に関わる問題は減ることなく、環境ホルモンや遺伝子操作といったかたちで現れている。また、熱帯林の過度の伐採という「体外環境」の副次的産物として、ウイルスからの逆襲も起きている。まさに、現代はそれらの原因である「循環システム」の攪乱そのものが問われているのだ。

小滝透 「天理比較神秘論への試み(8) ト라우マの転換——生い立ちの風景」

今回は、教祖とムハンマドの生育歴を概観することにより、両者の相違と共通性を比べてみた。そこには、非常に多くの相違があり、時代背景・文化背景も異なるが、ただ一点神に対する無類の信頼が存在する。そしてそれは、自らの心の闇(トラウマ)を埋めることも意味したことで、絶大な神への帰依となるのである。今回は、両者の死の形を語ってゆくことにしたい。

小林正佳 「芸術・癒し・宗教(8)動きの文化性」

それぞれの社会はそれぞれ独特の人間関係や制度のネットワークを築き上げていて、その中にわたしたちはからだをもって参加する。同じ文化に生きるとは、価値観を同じくすること以上に、共通の波長に従って生きて行くこと、同じリズムに振動するよく似た身体的条件を生きて行くことを意味している。あらゆる動きは文化的偏りをもっている。たとえば、百年前の日本人は、わたしたちのように歩かなかった。元々、両足の動きに応じて両腕を振るということをしなかったらしい。従って、上手に走れなかった。

上杉武夫 「都市の再生に向けて—アメリカ通信(8)二人のアメリカ人」

筆者がアメリカで巡り会った人々の中で、最も印象に残る二人のアメリカ人を紹介する。彼らはそれぞれ別の南部の州に住んでいるが、彼らを通して、サステイナブルな都市で生活できる人々のタイプを明らかにしよう。

金子珠理 「ジェンダー女性学情報（8） ネイティヴのトポス [3]」

ポストコロニアル状況においてもサバルタンが語れないことを英語帝国主義と「毛沢東主義者」を例に示す。しかしわれわれは天理というローカルな場から、自らのポジションを倫理的に引き受けつつ発信していきたい。

深川治道 「エコロジカル インタビュー（8）環境マネジメントシステムと大学 [1]」

早稲田大学のEMSにおける環境方針、目標などを紹介する。その中から例を上げ、その成果や、廃棄物削減やリサイクルを巡る現在の問題点の一部を報告する。また、環境教育・啓発に関わる大学、学生、地域の活動の一部を紹介する。

塩澤千秋 「脳死・臓器移植—カナダ通信（8）臓器移植と宗教との関係 [1]」

ユダヤ教の教義から臓器移植、脳死についてどのように受け止めているか、三人のラーバイにインタビューした。聖書、タルムードに基づく、真摯な議論の足跡を感じた。

小椋 博 「宗教・スポーツ・賭け（8） スポーツと賭け—テニスに見る上流階級とブルジョアの戦い— [1]」

全米アマチュアローンテニス大会は、1881年アメリカ東部、ロードアイランド州ニューポートのニューポート・カジノで始められ、その後ニューヨーク・フォレストヒルズに移されるまでの34年間、カジノの中のテニスコートを舞台に繰り広げられた。